

シンポジウム筆録

2018 年度全カリシンポジウム

「全カリ」の意義と役割を改めて考える

日時：2018 年 11 月 22 日（木）18 時 30 分～20 時 00 分
場所：池袋キャンパス 7 号館 1 階 7102 教室

登壇者：郭 洋春 立教大学総長／経済学部教授
佐々木 一也 前全学共通カリキュラム運営センター部長／文学部教授
水上 徹男 全学共通カリキュラム運営センター部長／社会学部教授
司 会：田中 秀和 全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームメンバー／理学部教授

田中(司会) 「全学共通カリキュラム（全カリ）」がスタートしたのが 1997 年、今日ではその設立に携わった教員が少なくなり、理念や歴史を知る機会も少なくなりました。2016 年度からは「RIKKYO Learning Style」（学士課程統合カリキュラム）が開始されるなど、全カリを取り巻く環境も変化しております。そこで本シンポジウムでは、まず全カリの発定時から現在までを振り返って理念や特徴を知っていただき、それを踏まえ、全カリの意義、役割を改めて考えて、今後の展開について議論する機会にしたいと思います。では、水上先生よろしくをお願いします。

建学の精神に基づく「全カリ」設立

水上 本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。立教大学の教育理念から順にご説明したいと思います。

まず建学の精神ですが、「キリスト教の精神に基づく人格の陶冶」がござえます。1874 年、チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が立教大学の前身となる「立教学校」を立ち上げ、キリスト教の精神に基づく人格の形成に向けた全人教育を展開しました。そうした歴史から、立教大学では「教養教育の重視」が今日まで継続しています。1955～1994 年度には、専門学部とは別に「一般教育部」が教養教育を担当していました。それが 1997 年に「全学共通カリキュラム」に変わり、学士課程の教育目的として、専門性に立つ教養人の育成を掲げて、全面実施されました。

「全学共通カリキュラム運営センター」（以下「全カリ運営センター」）の役割は、全カリの運営、2016 年度から開始した「グローバル教養副専攻」の運営です。そして現在、立教大学には 10 学部ありますが、全カリ運営センターは学部間のネットワークの



水上 徹男

中心的な役割を担い、教育革新の運動体としても機能しております。

全カリ誕生の背景には、それまでの一般教育部への反省点がありました。例えば、「一般教育部と専門学部との連携が十分でないのではないか」「学生のニーズに基礎教育が応えていないのではないか」「外国語教育が社会の要請に応えていないのではないか」「組織の硬直化」「カリキュラム固定化の弊害」などです。こうした反省点を踏まえてそれまでの教育を見直し、建学の精神に基づいて時代に応じたリベラルアーツ教育を今日まで展開してきております。

全カリ実施の経緯について少しお話いたします。1991年に大学設置基準の大綱化が行われ、各大学ではさまざまな改革に取り組もうという動きがありました。立教大学ではそれぞれの教養科目群を一新するために、1991年10月に「全学カリキュラム検討委員会」を、1994年12月には全カリ運営センターを発足。1995年3月まで行っていた一般教育部が廃止されて、1995年4月から、全カリ運営センターによる一般教育課程の運営を開始し、1997年4月から全カリを全面実施しました。

時代に合わせて若干カリキュラムの変更をしながら、2008年には異文化コミュニケーション学部やコミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科ができ、スポーツ教員が特定の学部と比較的多くなり、また異文化コミュニケーション教育を言語の先生方が担うようになりました。そうした事情の中、2009年に全カリ運営センターは組織改編をしました。

全カリは「言語系科目」と「総合系科目」に分かれています。2010年度には言語新カリキュラム、2012年度には総合新カリキュラムを開始しました。2016年度から「RIKKYO Learning Style」を開始し、ここから「全学共通科目」という名称を使うようになりました。

言語系科目では、「言語A」で英語を、「言語B」で英語以外の言語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語、日本語、ポルトガル語、日本手話を展開しています。「言語A」ではこれまで習ってきた基礎言語である英語の未知の側面に触れること、「言語B」では新しい言語を学び未知の世界を開くことにより、複数の言語を使用する「グローバルな教養」を身に付けることを目標としています。必修で言語科目を学んだあとも、さらに学びを発展していけるよう、レベル別の科目群を用意しています。

総合系科目では「学びの精神」「多彩な学び」「スポーツ実習」という3つの枠組みの中で、さまざまな科目を展開しています。「学びの精神」では既知分野同士の未知のつながりを知るなどして、主体的に学ぶ姿勢を身に付けます。つまり学部で専門科目を学びながら、全カリで基礎科目を受け、それらを相対化して見ることで学習的な視野を広げていくのです。「多彩な学び」でも、専門を相対化していくことを実践的に学習できます。「スポーツ実習」は人気科目ですが、生涯にわたる健康維持の意識、運動能力を高める以上に、その方法を身体化することを目的としています。

「言語系科目」「総合系科目」といった基礎教育にも段階を追った教育を導入し、大学

生活の4年間を通じて、専門教育と基礎教育を有機的に連携させていくのが私どものモットーであり、新しい教育カリキュラム「RIKKYO Learning Style」のコンセプトです。

そして2014年には文部科学省による「スーパーグローバル大学創成支援事業」に本学が採択され、その後さらなるグローバル化を進めてきました。同時に、2016年度以降の入学者を対象（2017年度から登録開始）に「グローバル教養副専攻」を開始し、すべてのコースでの海外体験を2024年度までの目標として掲げました。まさに専門性に立つグローバル教養人の育成のために展開しています。グローバル教養副専攻には、「Language & Culture Course」「Arts & Science Course」「Discipline Course」の3つのコースがあり、修了すると卒業時に修了証が発行されます。

ここで一般教育部時代から全カリ創設に至るまで関わってこられた佐々木先生から、今日までの全カリの経緯についてお話いただければと思います。

全カリは教養教育を考え続ける運動体

佐々木 私は当初一般教育部に着任し、その後、大学設置基準の大綱化によって一般教育部が廃止されてからは文学部に所属しています。一般教育部は、一般教育課程というカリキュラムを運営、実施する組織で、国立大学でいえば教養部——例えば東京大学だと教養部をもう少し大きくして教養学部と言っていました——まずそこで1、2年生が学び、3、4年生で専門分野に進む、というのが典型的な戦後の新制大学の姿でした。



佐々木 一也

しかし新制大学がはじまって20年、30年と経てくると、カリキュラムが形骸化してくることもありましたが、そもそも最初から日本の大学制度と、一般教育課程は、必ずしもなじんでいなかったという事情があります。これは、もともと日本の大学はドイツの学校と同じようなタイプであり、旧制時代は、小学校、中学校、高等学校とあり、大学は3年制で専門だけを勉強する場所でした。高等学校では大学で勉強するために必要な語学力、英語、ドイツ語、フランス語、そして各種の基礎教養、あるいは専門の基礎となるような知識を幅広く勉強して、自分の専門分野を自覚してから大学に進学するという方法をとっていました。

戦前の日本の教育システムは、戦後、アメリカを中心とした連合国によって、日本の民主化を妨げるものとして受け取られ、教育が民主化されたときに、高等学校と大学との関係も抜本的に見直されました。そして旧制の高等学校を組み込むような形で、新制の大学がつくられたのです。戦前の大学は3年制で専門だけを学ぶようになっていましたが、戦後は一般教育課程の2年間を加え、専門課程を2年間とし、4年制が導入されました。

アメリカにおける当初の大学の建学の理念は、リベラルアーツ、幅広い教養、専門の

基礎となるもの、あるいは民主的な社会を自覚的に運営していくさまざまな知見やスキルをもった高度な市民を育てるというものでした。日本の大学もアメリカの教育に合わせようという向きがありました。しかし、新しいアメリカ式の制度も当初からいろいろとごたごたがあり、結局 1991 年の大綱化で一般教育課程を設けなくてもよい、各大学は建学の精神、または学部の専門性に即して、自由にカリキュラムを組んでよいということになり、そこから「よーい、ドン」で、大学の改革競争がはじまり、現在に至っているわけです。

立教大学は、アメリカから渡ってきた聖公会系のキリスト教の宣教師によって、リベラルアーツを基礎としたアメリカ風の教育理念でつくられた学校です。したがって当初の「立教学校」から「立教大学」となったあとも、幅広く教養を育てるというリベラルアーツカレッジとしての色彩を強くもっていました。これは戦後、新制大学になった際、いち早く一般教育部という組織を設立したことに現れています。それに対し、例えば東京六大学に所属している早稲田、慶応、法政など、立教よりも大きな私立大学は一般教育課程を専門にする組織を持っていませんでした。とくに早稲田の場合は、一般教育課程と専門課程の教員を、学部ごとにもっているという形でした。日本大学や中央大学などの大きなところは、みんなそのようなスタイルでした。社会も大学に対し、幅広い教養を必ずしも強く期待していなかったので、一般教養課程を設けていた他大学も、それを廃止しようという方向に進みました。

本学はリベラルアーツカレッジの伝統を引き継いで一般教育部をつくり、専門の学部と連携してやっていたましたが、学生たちの意識にそうしたシステムがなかなか浸透しませんでした。それで文学部、経済学部、理学部、社会学部、法学部の 5 学部の教員の代表者が集まって、「一般教育も自分たちがやるのだ」という意識をもって、全カリ検討委員会がつけられました。そこには一般教育部の代表者も含まれていましたが、主導権をとったのは専門学部の代表者です。専門学部である文学部や法学部が「自分たちにも教養教育をやらせてほしい。1 年から一般教養も含め、すべて自分たちが教育をするのだ」と申し出てきたのが、全カリ運営センターが誕生した真相です。教養教育を軽視して一般教育部をなくし、専門だけを学ばばいいというのではなく、「各学部が教養部分、リベラルアーツも引き取って、自分たちの力でやっていくのだ」ということで、全カリ運営センターが設立されました。

この設立は、一般教育部がまだ存続している間に、同時並行で行われました。こういう言い方は語弊があるかもしれませんが、各学部で選ばれた有力教員が一般教育部の権限を奪って、一般教育課程を運営し実施するという形態をとったわけです。こうした例は、全国でも立教だけです。

全カリ運営センターの会議では、毎週金曜日は午前様かなというような、大変熱い議論が行われました。利害の対立、考えの違いもあり、激しい議論を行いました。そのとき私は専門委員で、同じく専門委員でいらしゃった司会の田中先生とともに、学部の代表者たちと一緒にカリキュラムをつくる仕事をしていました。まるで「梁山泊」のよ

うな感じで、教育理念と情熱のある経験豊かな教員が集まって、熱い議論を交わし、カリキュラムをつくっていきました。全カリは、「立教大学の学生が全員やらなければならないこと」という意味合いでつくられたものです。非常に思い入れのある、学部で重視してきたカリキュラムであるといえます。

それから20年以上の年月が経ち、制度的疲労もあり、現在では当初の精神が少しずつ忘れられつつあるかなと思っております。新しく着任された先生方はこうした事情を知らず、与えられた仕事として受け身で授業をされている方も散見されるようになりました。そこで本日、「全カリの歴史や意義を再確認しましょう」という場を設けていただいた次第です。

水上 佐々木先生、ありがとうございます。それでは、郭総長に全カリを振り返ってお話しいただきたいと思います。

専門学部が教養を支える



郭 洋春

郭 本日の参加者の方方で、全カリの発足当初を目の当たりにしていた方はいらっしゃるでしょうか。挙手していただければ……3人しかいないですね。多くの方は全カリの経緯についてご存じないということで、全カリの原点を改めて見つめ直そうという本日のシンポジウムは、とてもタイムリーだなと考えております。

私は1994年、全カリ運営センターの発足時から、全カリの社会科学研究室に入り、その後4年間を除き、昨年度までずっと関わってきました。これまで全カリの

科目をいくつかコーディネートしたのか調べてみたら、昨年度までで18科目でした。科目担当者として授業で関わった数を含めると、延べ24科目担当してきました。

先ほどの佐々木先生のお話からすると、専門学部全体が教養教育を支え、全カリの主体となっているのが立教大学の一つの特徴です。それが大きな理念として今日に生きているのではないかと考えております。

なぜ専門学部が教養を支えるのかということ、専門教育だけを学んでいると視野が狭くなってしまふ、あるいは自分の専門の価値観でしか物事を見られなくなるからです。より視野を広く専門を学ぶためには、専門学部の教員たちが、教養をどのように身に付けるのかを意識的に考えるべきでないか、というところから全カリは出発したと思うんですね。専門だけでは、世の中の複雑な動きや人間関係、世の中を渡っていく術を学生たちに教えられません。目指すところは、専門分野と全カリによる教養の融合によって多角的な人間をつくり出すことであり、それが今日、多くの人たちに浸透しているのではないかと考えています。

全カリのシステムが浸透していることは、今日のカリキュラムにも現れています。1997年に全カリがはじまった当初は、コラボレーション科目（当時は総合B科目）は7科目しか展開していませんでした。その中で、学部からの提案は経済学部と理学部の2つだけでした。ところが2017年度のコラボレーション科目だけを見ても、16科目展開しており、実に20年で、科目数が倍に広がっているのです。さらに科目の内訳を見ると、学部からの提案も3つ増えています。さまざまな部局によって展開され、まさに全学で全カリを支えるという形が、かなり浸透してきています。

現状、さまざまな問題があり、それをどう解決していくかも課題ですが、これまでの20年間の成果は確かに現れています。理念としては「全カリは全学で支える」としながら、出発時点では特定の学部や研究室だけが担っていたのが、現在ではほとんどの学部、研究室がさまざまな形で関わるようになりました。横の展開が非常に大きく広がったところに、全カリの成果があるのではないかなと思うわけです。

多角的な教育を目指して

水上 ありがとうございます。ここで現在、全学共通科目がどれくらいの規模で展開されているかをご提示したいと思います。2018年度的全学共通科目の規模（コマ数）ですが、まず言語系科目の、「言語A」が2,175コマ、「言語B」は900コマ、合わせて3,075コマ（同一の科目を含む）が言語系科目で展開されています。総合系科目では、「学びの精神」が132コマ、「多彩な学び」が424コマ、「スポーツ実習」が150コマで、合わせて706コマ（同一の科目を含む）です。全カリ全体では3,781コマを今年度提供しています。言語系科目は3,075コマのうち3分の1くらいは、「英語ディスカッション」の授業で、1クラス8人程度という少人数で展開しています。こうした形で、学部の専門スタッフに支えられて幅広いコマの展開ができるようになっていきます。

全カリの課題は、郭総長、佐々木先生からもお話しいただきましたが、現在の大学が置かれている厳しい状況の中でいかに運営していくか、全カリ自体の制度が疲弊しているのではないかとすることがあります。他方で、2016年度からは「RIKKYO Learning Style」の導入など、新たな試みも行っています。今後、全カリはどこに向かっていくのか、また何が必要となってくるのかについて、郭総長からお話しいただけますでしょうか。

郭 私は、全カリには2つの大きな意義があると考えています。

1つ目は、全カリは、立教の軸となる価値観や理念を学べるもの、またそれを意識させてくれるものだと考えています。例えば経済学部では経済の理論や政策、歴史を学びますが、どこの大学の経済学部でも、テキストが決まっていて大抵同じ内容を学ぶわけです。そうした中、立教大学で学ぶ意味は、全カリでリベラルアーツ、教養教育を再認識できる場があることです。

2つ目には、全カリを通じて教員同士の交流ができ、新たな研究が広がることです。コラボレーション科目は、1科目を複数の教員が担当することが特徴です。私の担当した科目では、他学部の先生か他大学の先生と共同で行っていました。私が一番はじめに担当した科目「アジアを知る」は文学部の小西正捷先生（現名誉教授）と共同でコーディネートしました。そのほかにも法学部や社会学部、経営学部の先生など、他の学部の先生方をお招きして、アジアをさまざまな専門性から見たときにどのように映るか、どのように勉強できるかなどを教えていただきました。

私は「アジア経済学」を専門にしていますが、私が思っていたアジアと、法学部や社会学部の先生が思っているアジアとは違うんですね。それを知ることによって、教員である私自身が勉強になるのです。教員自身が、自分の専門性や知識、あるいは価値観を改めて見直すことができます。ここが、全カリのいいところです。

その結果、全カリによってつながった先生同士で新たな研究機関が生まれています。例えば「平和・コミュニティ研究機構」がそうです。つまり全カリが、インターカレッジな学部横断的な研究所をつくるきっかけになったのです。今まで付き合いのなかった教員同士が一つの共通テーマについてお互いに教え合うことによって、新しい研究の萌芽が生まれ、新たな知見が生み出されてくる。

こうしたことがなければ、違う専門分野の教員同士が一つのテーマについて議論する場合は、今の立教大学にはほとんどありません。今、従来の研究の限界を飛び越えるために学際的な力が非常に重要だといわれていますが、そうした役割を設立当初から担ってきたというところが、全カリのもつダイナミズムであると考えています。

キリスト教の理念を踏まえた教育を

水上 佐々木先生はいかがでしょう。

佐々木 全カリの未来についてですが、まずこれからの日本社会で、立教大学がどういう地位を占めていくべきか、また、これから卒業していく若者が、日本の社会、あるいは世界に出て、どのような人生を送っていかなければならないかを想定しながら、カリキュラムを組んでいかなければならないと思います。

今、立教大学はグローバル化を進めていくために、新たに外国語に力を入れています。英語については、当初の一般教育部のときは、読解（講読）を中心に進めておりました。理学部の学生にシェイクスピアの授業で『ソネット集』を原文で読ませるような授業が行われていたわけです。それも意味がないわけではないのですが、その後は、学生たちが直接役立ったという実感、実力が付いたという実感がもてるような英語授業、コミュニケーション能力を育成の中心とする）ほうへシフトしたことが当時ありました。

最近では、コミュニケーション能力、あるいはスキルということではなく、本当の意味で英語

を使って人間を理解する、物事を正確に把握する力が必要となってきました。会話はもちろん大事ですが、書いたり、読んだりという能力が改めて見直され、そちらの学びのほうに英語の科目がシフトしていく傾向があります。

これは今後大学を卒業して、さまざまな形で世界スケールで生きていくときに必要な学びです。世界スケールといっても、別に飛行機で世界を飛びまわるという意味ではありません。日本で生活をしていても、日頃食べているのは純国産の食品などごくわずかで、ほとんどの食品は世界スケールです。食品がどこからきているのか、どういう薬品を使って育てられたものなのかなども含めて、どういう状況に自分たちがいるのか、そして、それらをつくっている人たちは、どういう人たちなのか……。自分のまわりのもの、生活の中で日常的に触れているものを隔てて、その向こうにある、世界の人を見なければならぬ、そういう時代になっているんですね。毎日口にしていてる食事は、実はすごく安く買い叩かれている食品で、つくっている人たちの生活を破壊しながら食べているのに、「もうおなかいっぱい」と言って捨ててしまっていたかもしれない。でも、これからは、それが許されない世界情勢になっていくわけです。そういった意味で、非常に敏感に、いろいろなことを理解しなければならない時代になっています。

そうした理解のためには、外国語をただ話せるというレベル以上のものがが必要です。当然、大学4年間だけで必要な能力が身に付くわけではありません。卒業したあと生涯、学習です。卒業してからも現状に留まらず、次々に学び直しをしていかなければならない。そのときに、学び直しをする方向性、何をどのように学んで積み重ねていくかの方向性を見誤ってしまうと、役に立たないスキル、あるいは自分にとって社会にとって害毒になるようなスキルなりパワーを付けてしまうという可能性もあります。時代の流行に惑わされず、本物をしっかりと見分けられる見識、役に立つもの、本当に人に喜ばれるものを選び取る感性を育てることが、教養教育に求められています。それを今、立教は実現しようとして努力していると思うのです。

他大学にはできない、立教が独自にできることといえば、建学の理念にあるキリスト教の考え方があります。これはキリスト教の教義を知ることではなく、「ある一つの価値を見失わずにもっている人の生き方」を知ることです。キリスト教の価値観を中心に、人と人とが結び付き合って共同して生きていく、生き方そのものです。ウィリアムズ主教の生涯は「道を伝えて己を伝えず」と言われていますが、人を犠牲にして自分が真っ先に業績を上げていい思いをするのではなく、人としてもっとやるべきことがあるだろうと。どんな状況でも周りと同じ、本質を見分けられる人を育てるのが、立教の建学の精神です。

そうした意味で、専門性を重視しつつもその専門が独りよがりにならないように、他の専門性をもつ人や専門性をもたない人たちにも理解してもらい、そのよさを知ってもらうために、工夫や努力をする知力を育てることが大切だと思うのです。そうした力を育てるためには、専門の中から、他分野に伸びていく触手を育てていくことが大事です。

言語能力についても同じことが言えます。大学の英語教育は、英語を流ちょうに話せ



るようにするためのものではありません。生涯、あらゆる場面で英語を活用するために、どう学びを深めていくかを知るための教育です。例えば、アメリカの英語だけが英語ではありませんし、シンガポール、マレーシアやケニアの英語だって英語です。そうした英語を分け隔てなく理解し、コミュニケーションをとっていく力を、次々に学びを重ねながら身に付けていくこと。何を学ぶか、どう学ぶかの視点を養うことが大切です。それは本質を見失わないようにして他の人々と協働するというキリスト教の精神があっただけで、多様な価値観との触れ合いの中で身に付きます。

立教大学では、全学共通科目を履修すれば、違う学部 of 学生と共に学べます。講義の場合は物理的に空間を共有するだけのこともあるかもしれませんが、全学共通科目の中にはゼミナールもあります。ゼミナールに参加すると、他の学部 of 学生同士、知的な材料を間に置いて、それを自分たちの知っている学問の方法論を用いて料理しながら、違いを味わう。「なんで君のやっている学問では、こんな考え方をするのか、私には理解できない」などとやりあうことによって、お互いにすり合わせをしていく。そうして、未知なものに対して目を開く経験ができます。立教はそれをしやすい環境なのです。

学部ごとに教室が決まっていないので他学部と交流がしやすく、全学部が自覚的に学生を外に出して他流試合をする方針でやっています。また、教員は所属する学部だけではなく、他の学部も含め「すべての学生を教育するのだ」という趣旨で着任しているは

ずです。自分がすべての立教の学生に責任をもっているという発想ですね。

キリスト教という一つの価値を中心に置いて、多くの人がそれを共有しながらつながっていく。それが立教の建学の精神であり、スクールカラーです。卒業生が久しぶりに会うと「ああ、やっぱり、お互いに立教人だよな」という感じがあると聞きますが、本学はスクールカラーが強いのだと思います。そうした精神が学び合いにつながって、「全カリの力」になっているのだと思います。

立教の建学の精神に基づいた全カリを、将来に向けて、つくり続けていきたいと思えます。それを実現させるためにも、全カリでは常に新しい試みを進め、学部で行う最先端の研究を、後ろでしっかりと支えていくという役割も果たしていただきたいと思っています。

リベラルアーツ教育とは何か

水上 佐々木先生、ありがとうございます。ここで、全カリが立教大学のアイデンティティを再認識する場であることや、人生を送る上での学び、教養教育の重要性を確認することができました。最後に、郭総長に大学政策という視点から、全カリ、全人教育の伝統、リベラルアーツの伝統、そうしたものが、今後どのように展開されていくのかについて、お話しただければと思います。

郭 立教大学は今年創立 144 周年を迎えました。また、築地キャンパスから池袋キャンパスに移転してちょうど 100 年です。ご存知の通り、ウィリアムズ主教が「聖書と英学」を伝えるための私塾としてスタートしましたが、この「聖書と英学」は、21 世紀の今に、ダイレクトに結び付いているのではないかとと思っています。

「聖書」とは、「人生の生き方」について問うているものです。つまり、人生を歩いていく上で試練や困難に出会ったとき、どう乗り越えていくべきかが、聖書にはさまざまな例えを用いて書いてあります。昨年、作家の吉野源三郎さんが 1937 年に書かれた『君たちはどう生きるか』を再版されて大ベストセラーになりました。主人公はコペルくんという中学生で、その叔父さんがコペルくんに対して「君はどう生きるのか」を問うていく物語です。今この本がこんなにも注目されているのは、グローバル化した複雑な社会の中で、どのように生きるべきか、多くの人が分からないでいるからだだと思います。この本にある内容を、この本が書かれるずっと前から問うているのが、聖書です。立教大学が聖書について教え続けてきたということは、人生の生き方をしっかりと教え続けてきているということです。今はそれが非常にクローズアップされている時代なのではないかとと思っています。

そして「英学」とは、単に英語を学ぶだけではなく、英語を母語とする国や地域の歴史や文化、伝統や習慣を理解し、異文化と共に歩んでいくということです。今の言葉で言うなら、「異文化理解、多様性の理解」ということなんです。 「英学」とは、立教大

学が目指そうとしている「グローバル化」の別の言い方であって、立教大学は出自から、まさに現在の世の中に合うようにそれを教え続けてきたのです。

ウィリアムズ主教が、世の中がどのように変わってもぶれない価値観として提示したのが、この「聖書と英学」です。これが今では日本の社会、企業、政府、あるいはあらゆる国々が、大事なのだと言いはじめています。立教はこれを昨日今日学びはじめたのではなく、百年以上前から目的意識的に、あるいは無意識のうちにも教え続けてきました。これが立教大学のすごいところで、これを支えてきたのが、全カリなのです。

今、世間では、実学志向の大学や科目が注目されていますが、世の中のニーズが変われば、それらはどう役に立つのかが分からなくなってしまいます。そこでわれわれの学んできた、どう時代が変わってもぶれない、非常にしっかりと地に足のついた理念や価値観、いわゆるリベラルアーツを教え続けることが、極めて大事な時代になってきているのではないかと考えています。

そして今、リベラルアーツ教育とは何かというのを、改めて考える時期に入っているのではないかと考えます。「リベラルアーツ」という言葉は、理解しにくく、受け取り方は人によって千差万別です。例えば東京工業大学におけるリベラルアーツは「文理融合」と表現されていますが、本学にはそれは当てはまりません。では「学際的」といえばピンときませんし、「教養」という言葉がそうかと言えば難しい。「リベラルアーツ」という言葉は、今の人たちにも分かりやすい言葉に、改めて翻訳する必要があるのではないかと考えています。

私の思う「リベラルアーツ」とは、物事の見方や考え方、人生の生き方の土台を支える理念や価値観、あるいはそれを考えるのに必要な知識のことです。そのように考えると、これはどんな時代においても必ず必要であり、今後もっと目的意識的に立教大学が発信していくべきことなのではないか、と考えています。

「生き方を考える」とき、核となる学びを

郭 現在、全カリでは 3,000 以上の科目を展開していますが、それだけ多く展開すると、学びが広く浅くなってしまうのではないかと。本当に学ばせたいこと、いわゆるリベラルアーツ教育、教養教育の目的を果たしているのかどうかという問題があります。

人生 100 年時代、大学を卒業してから 80 年以上生きていくうえで、必要な知識や価値観について、専門科目以外のところ、いわゆるリベラルアーツ教育を全カリが担っていく。一人ひとりの学生がこれからの人生において、さまざまな試練に立ち向かい、克服していけるような考え方を教えるカリキュラムをもっと深掘りしていくことが、これからの全カリには必要だと思います。歴史を振り返る中で、今の到達点はそういうところではないかと考えております。

そういう意味で、3,000 以上ある全カリの科目の中で本当に学んでほしい科目があるはずで、学生にもの見方、考え方、人生の生き方をしっかりと身に付けさせるなら、

まず第一に、「哲学」は学部を問わずにしっかりと教えるべきだと思っています。これがないと、人の言いなりになって、あっちに行ったりこっちに行ったりしてしまいます。しっかりとした人生観や価値観を身に付けさせるなら、やはり哲学の本質をしっかりと教えることが重要だと思います。

2つ目には、これはちょっと唐突かもしれませんが、数字、いわゆる「統計学」です。文学部の学生であれ、異文化コミュニケーション学部の学生であれ、企業に入れば否が応にも数字と付き合っていく必要があります。数字の意味が分からないと社会の中でやっていけません。リベラルアーツの起源に数学教育が入っているのは、やはり数学を通して世の中が分かることを示しているわけです。

3つ目には、時代に即した「情報」をしっかりと学んでいくことです。これだけインターネットを通して情報を自由に送受信できる時代の中で、自分なりに情報をどう分析していくのか、何が正しく何が間違っているのかをいかに判断するかなど、情報を処理する能力がないと、フェイクニュースのようなものに流されてしまいます。

そして4つ目には、「思考力」を養う授業、「GLP（グローバル・リーダーシップ・プログラム）」です。これは企業と連携し、教員を何人も配置して少人数で行う授業で、学生が自ら課題を設定して答えを導き出すものです。もともと経営学部からはじまった科目で、全学で展開しているのは珍しく、これを全学で展開している立教大学は実はすごい大学なんですね。素晴らしい試みをしています。認知度が低いので、もっと多くの方に知っていただけたらいいなと思います。

このようなことすべてが、一言で言うなら、「キャリア」につながるのではないかと。職業的な経験という意味のキャリアではなく、生き方を考える経験をキャリアと呼ぶなら、今申し上げた4つ（哲学、統計学、情報、思考力）の知識や能力は、まさに立教大学におけるキャリア形成にとって極めて重要なものであり、それを全カリが、学部以上に支えているのではないかと。そういうことを、もっと積極的に学部に対して言うべきですし、あるいは全カリがもっと意識的にそうした学びを学生に教えていくような立ち位置に変わっていくべきだと思っています。そうすることで、全カリは今後、第3ステージ、第4ステージに向けて、さらに多くの大学から注目されるだけではなく、立教大学のすべての学生が「私は4年間、このような素晴らしい全カリというカリキュラムを学んで卒業しました」と堂々と言えるようになるのではないかと考えています。

就職活動のときに面接で「あなたは何を学びましたか」と聞かれたとき、「私はリベラルアーツを学びました」と答える人はまずいない。「経済を学んだ」、「法学部のこういうものを学びました」と専門について語ります。しかし今は、人間性やコミュニケーション能力が重要視され、大学で専門をいかに学んだか以上に、その人間の価値観や人生観、ものの見方を最終的に評価して、「この会社にとって必要な人間である」とか、「この会社でもっと活躍してもらいたい」と判断する時代です。立教大学が掲げてきたリベラルアーツ教育というものを、もっと強く打ち出すような教育をすべての学部構成員が意識的に考える必要があるのではないのでしょうか。

あえて誤解を恐れずに言うと、全カリの中にも必修とは言わないまでも、専門を学んでいくうえで、核となる科目が存在するのではないのでしょうか。それは、やはり建学の精神である「キリスト教の精神」であり、たとえキリスト教系の科目を取るという形で意識的に学ばなくとも、本学の歴史を学ぶ中で身に付けてもらいたいと思います。

そのように考えると、この140年を超える歴史の中で今こそ、立教大学の全カリは、もっとも重要なことを求められており、それを展開しなければなりません。すべての構成員は、それを目的意識的に、学生はもちろん社会に対して訴えていかなければならない岐路に立っているのではないのでしょうか。それを私たちは政策としても、大いに打ち出していきたいと考えているところです。

質疑応答

水上 会場の皆さまから、質問などございましたらご遠慮なく挙手をお願いします。

質問者① 郭総長のお話、感銘を受けました。2点お伝えしたいと思います。

まず1つ目ですが、全カリの中でもキリスト教系の科目をどう位置付けていくかは大変難しいことだと思います。ミッション系の他大学は、キリスト教系の科目をほぼ必修にしているので、全カリの改革議論の中でも、せめて準必修にできないか、「学びの精神」の段階でも、せめて卒業まで2単位くらいは、キリスト教系の科目の単位を取って卒業したほうがいいのではないかという議論もありましたが、私はあえてそうしないほうが立教大学にはふさわしいのではないかと考えております。必修科目としていやでもなんでも取らないとならない形に追い込み、「イエスの弟子は何人でしたでしょうか」などといった知識を詰め込むのではなく、「どのような生き方をすべきか」とか「心理を探究することの意味」とか、「世界、社会の痛みに共感できる感性」といったものを全カリの科目の中で、あるいは各専門学部の中でも身に付けられるようにすること、これが本学におけるキリスト教教育の大事な点ではないかと思えます。

実はキリスト教系の科目は、かつて「キリスト教倫理」が必修であったところと科目数は変わっていません。違うのは、必修ではなくて学生たちが選択できるという点です。それ以外の哲学系や、さまざまな総合系科目の中に、これはキリスト教教育の科目であると堂々と言えるようなものがたくさんあることを、むしろ大事にしたいと思っております。そのような立教の特徴を生かしていきたいと思っております。

そして2つ目に、全カリは一貫して、教職員の教育改革運動であったということですよ。おそらく今後、学士課程、「RIKKYO Learning Style」についての議論の中でも、教育改革運動としての全カリのエネルギーをいかに今後引き継ぎ発展していくかについて、さまざまな角度から討論されていくのだと思います。

全カリの中で私が大事にしたいと思っているのは、郭総長がおっしゃったような企画提案型の授業です。専門の異なる複数の教員が学際的に集まって運営する企



画提案型のコラボレーション科目が、全カリの大きなシンボルだと思います。財政的にはコストがかかりますが、多数の提案があること、学部からだけでなく部局からも出てくるところに、全学を挙げての教職員共同の教育改革運動の効果が表れていると思います。そこは大事にさせていただきたいと思っております。

郭 ありがとうございます。

1つ目のキリスト教系科目については、おっしゃる通りだと思います。先日参加しました聖公会系の大学の集まりで「みなさんの大学に入ってくる学生はミッション系の大学と知って入ってくるのか、それとも、入ってから気付くのか」と質問したのですが、すると結構な割合で、知らないで入学してくる学生がいるとのことでした。立教も、そういう学生が多いのではないかと思います。入学後に、チャペルがあって、いろいろな行事を見て、「立教ってキリスト教系の大学だったのか」と知るという。キリスト教というのを、それほど強く訴えていない現状があるのでしょうかけれども、他大学では確かにキリスト教系の科目を必修でやっています。ただ必修でやっても、キリスト教の理念について深く理解しているかという、実はしていない。単なる卒業の要件の一つとしての必修科目としか捉えていないので、本当にそれを自分のものとして身に付けるところまでいっていないのです。こうしたことが大きな課題であると、どこの大学もみんな言っています。

大切なのは「うちの大学はキリスト教系の大学なのだ」と強制的に教えるというより、

4年間、学生生活を通じて自然と身に付くよう、学生生活のあらゆるところで建学の精神に触れる仕掛けをつくることです。それを実現するための大きなハブ、中核になるのが、全カリや学生キリスト教団体（チャペル団体）です。それが日常的にあり、「私は立教大学で日常的に建学の精神に触れ、さらに専門の中でも学んで社会に出ていくのです」と語れるようにするのが、本来の大学のあるべき姿ではないかと。そうなるためにわれわれは、全カリや教員だけにそれを任せるのではなく、もっと意識的に取り組んでいく必要があると思っています。そして2つ目については、佐々木先生からお話しいただけますでしょうか。

佐々木 企画提案型科目の中にあるコラボレーション科目は、教員が3人まで教壇に立てるシステムになっています。3人の教員がいるということは1つの授業に、普通の科目の3倍のコストをかけていることになります。また、教材などの準備にも多少の予算が付けられています。それだけに充実した授業になるので、学生にとっても面白く人気があるのですが、コストの負担が大きいいという側面もあります。ただ、先ほどのキリスト教の精神からいえば、学部以外の部局からも授業を提案できるのが本学の特徴であり、大事に育ててもらいたいと思っています。

郭 佐々木先生のお話は、まったくその通りだと思います。コスト面の話がありましたが、お金をかけてもやるべき意義があるなら、それは全学で叡智を出し合い、実現できる方法を考えていく。そういうところに立教大学らしさがあると思います。今後は、それを現場の方々だけにお任せするのではなく、大学側が責任をもっと積極的に向き合っていくべきなのかなと思います。

水上 コラボレーション科目について、ご意見をありがとうございます。運営のありかたについて、私どもでも今後検討してまいります。

質問者② 今日は貴重な機会を、ありがとうございました。私は、1986年に本学経済学部を出ており、昨年からご縁があって全カリの科目を担当させていただいております。また校友会でも代議員ならびに専門委員をやっており、毎回、代議員会にも出ておりますが、全カリの仕組みや経緯については存じ上げませんでした。今、立教のOB・OGは20万人となりました。そうした方々が学んだころと違った新しい試みや、さらにリベラルアーツに力を入れているということは、ウェブサイトなどで内外へ発信されていると思いますが、一方でよりOB・OGの方々に知っていただき、それを配電盤としていろいろな方々に知っていただくのも必要なのではないかなと思っています。

昨年、授業の一環として学生に「立教の創立者を知っている？ チャペルの隣に銅像があるけれど、あの人誰か知っている？」と聞いたら、118名学生がいる中で手を挙げたのが十数名程度でした。履修生は2、3、4年次生なので、多分、どこかで聞いて

はいと思うのですが、この方々が将来卒業されたとき、どんなに「道」を伝えていようと、自分の大学の創立者を知らないのはちょっとまずいのではないかと思います。どこかで強調する必要があるのではないかと、大学 OB、兼任講師の立場から申し上げました。

佐々木 ありがとうございます。比較的、本学は自校教育とあって、大学の由来や歴史、理念などについては全カリでも授業を設けて力を入れている大学なのではありますが、まだ十分に浸透していないということです。今後また力を入れてやってまいりたいと思います。

水上 まだまだお話は尽きないと思いますが、そろそろ、時間も迫ってまいりました。佐々木先生からは「全カリの力」というご発言、また郭先生からは「共に歩んでいく」というご発言もございました。教育面では全カリが大学全体の結節点となって、その力を発揮していくことが「全カリの力」です。「共に歩んでいく」のは、学生の立場なら、他学部の学生と一緒に学んでいくこと、教員の立場なら、全カリを支えながら、他学部の学生や教員に接し、専門以外にも取り組んで、自分自身を見直していく機会にもなっています。

このような本学の全人教育の伝統、この全カリは、全学の教職員の協力のもとに成り立っており、兼任の先生方にも多くのお力添えをいただいております。これまでの全教職員、そして兼任の先生方のご協力に、ここで改めて感謝申し上げます。今後もこれまで同様、全カリの取り組み、展開にご協力くださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。